

いってばかり(心中天狗息)
「善むかる。合點す。推知す。歌へる。萬葉集に、「月日を歌みて」と見えたる。「よみ」をみ見。

*よめ 好い男さへ稀なれば、少しよめなる女房のびかしやかぶるは科ならず(薩摩歌)
「よめ」は弱女の義、たをやめ。優麗な女。倭訓彙に「よめ。婦をいふ、弱女の義也、手弱女人といへる意也」。

よめのふし 骨あひ肉なみよめの節(源義經)
「夜服節」馬の前脚の膝關節。都會節用百家道に馬形之名所の圖説を載せ、馬の前脚の膝關節の少し上に夜晒と記してある。倭訓彙に、「よめ。倭名抄に夜服をよめり、馬の前脚に有、或は昔によべり、其形蹄の如し、よて附蹄ともらふ、よめの節は屈の節とらふ是也」。

よもぎのや 産屋の儀式柔の弓、蓬の矢事七夜の御賀(松風)
「蓬天蓬の葉で羽を短い矢をいひ、男子出産の時、これを柔の弓につがへて四方を射、以てその子の將來の雄飛を祝福したものである。蓋し禮記射義に「男子生、桑弧六、蓬矢六、以射天地四方、天地四方者、男子之所有事也」と見え、支那上代の故事にもつづいたのである。太平記卷二十五、醫師評定の條に「六月八日の朝生産容易くして、然も男子にてぞおほしける、蓬矢の慶賀天下に聞えしかば」。

*よりおや 寄親の勘十郎に打明けて(歌念佛) 中間頭寄親の四十平下見(して) (薩摩歌)
「寄親」親方。倭訓彙に「よりおや。寄親の義、寄は寄寓の謂、親は親方の如し、事文類聚の聖主也といへり、よりこも寄子にて、よりおやの對稱也」。

*よりかぜ 未ば淀のや男山、麓に立てる夫婦塚、その二道により風の、悋氣争ひ理をもちて、霜にふけたる女郎花(松風)
「頼風」めを「づか」を見よ。

*よりにんぎやう これ摩耶夫人調伏のより人形、生れ年御名を書き(龜遊)
「寄人形」靈を寄らせる人形の義、咒詛しようとする人に似寄せて作れる人形。

*よりぼう より盗人・杖よ帚よ提灯と、若い者ども駈出る音(生玉)
「寄棒」挿手などが用ゐる五六尺の圓い棒。

*よるのおとど 殿上・晝御座・夜の御殿(振袖始)
「夜御殿」清涼殿内晝御座の北の妻月の内の稱。「朝拜殿」尊あれば云云を見よ。
よるのとの これ夜の殿、我は微塵もたくまぬこと、皆親爺の無分別より起つた(天鏡)
「夜殿」夜の狐をいふ。越谷秀實編物類稱呼卷二、動物に「きつね。関西にて晝はきつね、夜はよるのとの」といふ。西國にてはよるのひととぞらふ、又関西にてすべてけつねといふなり。

て(吉岡染) 何の因果にかよるこびしてもう三年、今宵の乳の漲ること(天鏡冠) 宇與の上臈悦びの氣がついて、うめき苦しみ給ふ聲(藤附)

「俣」出産の悦の義より轉じて分娩するをいふ。生む。「悦びし」もう三年の悦びは名詞。出産。「悦びの氣」とは産氣をいふ。
よるひぐさ 小草の錦色色の、鎧草として小手さし原(千疋犬)

「鎧草」牡丹の異稱。刺あるによつていうた名であらう。非密蔵時記薬草・夏の部に「よろひ草。牡丹の一名なり、名義未詳、夜白神の略言にや」。

よるひびぎ 金物の音に目や覺めん、鎧づきすな足音すな酒呑童子枕(言葉)
「鎧付」絶えず鎧を揺上げて隙の無いやうにすること。平家物語卷九「二のかけの條に「鎧付を帯せよ、裏かかすな鎧を傾けよ」。

らいぎ 頼朝が世にこの仙鳥の出づる事来儀の鳳凰これならん(扇八景)
「来儀鳥の来り舞うて容儀あること」。畫經・益我篇に「雷器九成、鳳凰來儀」とありて註に「來儀、像舞而有容儀也」。

らいくわん 私ば雷煥が子孫雷同と申す鍛冶(唐船晒) 雷煥といふ者天文を考へ、土中を鑿つて干將莫邪の二劍を得たり(堀山遊)

「雷機」晋時代豫章の八、韓蒙に通じ、武帝の時斗牛の間に紫氣あるを判して、豫章郡城縣の獄屋の基を掘つて、雷泉・太阿の二寶劍を得た。詳しくは普書及び藥求に出てある。ちやうくわ「ばくや」を見よ。

らいさん 持經禮讚つくろはす(輝九)
「禮讚」善導大師の撰往生禮讚の略。阿彌陀佛の淨土に往生せうと願ふ者の晝夜六時に禮拜讚歎するに用ゐる讚歌である。
*らいじやうどうのゆめ 御供の武士には渡邊の綱調度掛として雷上動の御弓、坂田の公時箆の(役關八)

雷上動の弓或は頼政の弓といへど定かでない。伊勢貞丈撰の四季草・春上、及び貞丈雜記卷十弓矢の部にこの弓のこと知れぬ由記してある。源平盛衰記十六、三位入道安藝等の條に「二十平したる大中黒の矢の表に、水破兵破と云矢二を指、雷上動と云弓をもたせたり」。

***らいち** 雑を立つべきらい地も無

く、人馬みちみち並居たり(最明寺
殿上人上巻) この石塔は此方、隣は
河津の墓、らい地せまつて氣の毒
とい(一丁)曾我扇八景

***らいち** 福は田間の義。福地とは空地、餘
地の意にふ。井原西鶴撰・日本永代蔵巻
六、銀のなる木は門口の松の條に「一間四方
の福地に株一本植えて見るも、我屋敷と思へ
ば樂む心のかはる事なし」

***らいたん** 切口より血流れて禮盤
長床末に染み(出世景清)

〔禮盤〕佛像を安置せる正面に置らるる高座
をいふ。勸戒の時に導師がこの上にのぼつて
佛を禮拜する。

***らういばん** 老陰却つて一陽の氣に催
され(大鏡冠)

〔老陰〕陰の極まること。易學啓蒙に「陰歌至
レ六而極、故云老也。この文は陰氣が極ま
つてくれば陽氣が兆すにうながされの意。

***らういばん** 月待つ夜半の管絃の御
遊、風俗催馬樂朗詠も玉簾深き聲
もれて(鎌倉歌)

〔朗詠〕聲を長うして高くその情感を詠講する
義。往時精神貴族が嬉、遊興につけ時の感
興に伴へる詩歌を朗唱したのが、終に曲節を
附けて朗詠と稱する一の謠物となつたのであ
る。朗詠は藤原公任以前に起つて日を追う
て盛になり、朝廷の儀式御遊にも用ゐられた
が、戰國時代に至つて衰微し、徳川時代にな
つて稍復興を見るに至つた。朗詠の樂譜を附
けた古本では、神官文庫本の文永二年の奥
書ある古寫卷子本の朗詠要抄などが現存して
ゐる。

らうかん 琅玕の臺を設け(浦島)

〔琅玕玉に似た美石。靈鑑・馬首篇に、「雍州
歐寶珠琅玕玕」
***らうせき** えい、狼藉な、さがとやら
ぢや(よざら)えい(生玉)

〔狼藉〕狼の草を薙て臥した跡の紛亂してあ
ることおしふ。よつてもつて亂れがはしむこ
と、亂暴の意にふ。史記・滑稽傳に、「亂暴
交錯杯盤狼藉」

***らうせき** それそのの御作法おと
なしくらうたげに、天晴源の世嗣
や(佐々木)

勢甚しの義。あまりに愛して我が心を勢すべ
き様に思ふをいふ。かはゆらし。

***らうびつ** 詮議にあつて牢ひつ(の繩
かかろのといふ恥と(冥途飛脚)

〔牢籠〕牢獄に繋げられることを婉曲にいうたの
で、臭い飯糰ふといふの類である。

***らうらう** 四郎二郎はらうらうとつ
かれわびたる如くなり(傾城反魂香)

〔老老〕老衰の貌。きのふはけふの物語(坂寛永
永四年刊)巻二にも落雁・松風といふ菓子
子の名が載せてある。書言字考節用集・服食
部に「落雁」。類聚名物考・飲食二に「今ら
くがんと云菓子有、もと近江八景の平砂の落
雁より出でし名なり、白き碎米に黒胡麻を村
村とかけ入たり、そのさま雁に似たればな
り、形は昔は洲濱のさまなりしが、今は種種
の形出来たり、かかろ物といへどもその初は
故由有しが後はとりうしなへる事多く、その
名同じくして物異に變るもの也。御前菓子

***らくがん** 八疊敷の落雁二箱、八尺
廻りの金米糖一折(大鏡冠) 落雁か
すてら羊羹(傾城反魂香)

〔落雁〕菓子の名。北條開水撰・晝夜用心記・寶
永四年刊(巻二)にも落雁・松風といふ菓子
子の名が載せてある。書言字考節用集・服食
部に「落雁」。類聚名物考・飲食二に「今ら
くがんと云菓子有、もと近江八景の平砂の落
雁より出でし名なり、白き碎米に黒胡麻を村
村とかけ入たり、そのさま雁に似たればな
り、形は昔は洲濱のさまなりしが、今は種種
の形出来たり、かかろ物といへどもその初は
故由有しが後はとりうしなへる事多く、その
名同じくして物異に變るもの也。御前菓子

***らくきよ** 落居の後はいま兄弟家
を追出し申すべし(卯月調色)

〔落居〕らつきともいひ、落着の意。瑠
璃天狗・三に「落去は落着といふに同じ。去
の字は宛字にて本字は落居とかく事下學集に
見えたり」

***らくしゆ** 京童の口ずさみ、落首
洛外とりどりに其一ふしを繪草紙
や(安腹切)

〔落首〕落首の一首の義か。時事人物を諷刺し
た匿名の狂歌などを、多く人目に觸れ易い場
所・事件の發生した處、或は其目的とする人
の門前に落し捨てたが故にこの名がある。和
訓彙には「らくしゆ。落首の音轉也といへ
り」とある。長町女院切のこの文は「落首に
類似の語落首をきかせて、洛外といひつづ
けたらう」

***らくへんげてん** 兜卒天には手な
取交し、らくへんげ天の戀衣、夫
と妻とが忍ぶ夜は互になつと打笑
ひ(五人兄弟)

〔樂舞〕化天路にて化樂天また化天ともいふ。
〔樂舞〕天の第一天安て、兜卒天の上三十三
二萬中甸の所で、その壽八千歳であるとい
ふ。欲界の四王切天云々を見よ。

***らくい** 眼の光け羅計・火星(關八州)

〔羅計〕羅帳と計都の二星をいふ。星命家には
羅帳をもつて天首の星となし、計都を天尾の
星となす。

***らじやうもん** 遣手のつなぢや、羅
生門あけてたもといふ(淀塵)

〔羅生門〕羅城門とも書く。京都平安城外郭の
南門で、朱雀大路九條にあつたこと云ふ。渡邊
綱が羅生門で鬼の腕を切つたことは、謡曲
羅生門にも見えてゐる。この文は、遣手の
名が綱であるから渡邊綱に思ひよせて、遊郭
の大門を羅生門と渡邊綱にいうたのである。

***らち** 徳兵衛忙しげに立歸り(これ
庄介喜兵衛時があかねの(重井簡)

身に引纏ひ寝て見ても、一人ころ
りはエエちがたない、(重井簡)

〔捨〕垣。縁が明くとは仕事のはかどること
にふ。賀茂の駕馬の時に見物人が馬場の欄
の明くの待たれたつてひしひしとに起ると
いふ。(慶草に、埒明くといふ詞は、春日社祭
禮の時金春氏の猿轡埒を開いて祝言を讀む
これより語人共に入ることから起つたとあ
る。埒が無いとはまきまりがつかない、物足
らない、つまらないの意にふ。)[らちが
ない]を讀みかた無いの音便とするはいかか
ら、[らち]がなしとは別の音便であらうが、
言葉集に「埒もない。埒明くとも云、又
讀みかたないとも書けり、埒訓菜、らちし助と
書けり、愚按、俗語は無埒の義に似たり」

***らつきよ** 「らくきよ」を見よ。

臘月 (最明寺歌)

十二月の稱。唐書に「以十二月爲臘月」。
下學集に、「臘月。支那十二月之祭名臘。故
云臘月也。」

らごら 釋迦は羅睺の親仁に
て(隅田川)

〔羅睺羅〕梵名 Rahula。釋尊の嫡子で母は
耶輸陀羅である。佛道修業に志し、その行の
密なること八萬四千の衆徒中第一であつたと
云ふ。

***らじやうもん** 遣手のつなぢや、羅
生門あけてたもといふ(淀塵)

〔羅生門〕羅城門とも書く。京都平安城外郭の
南門で、朱雀大路九條にあつたこと云ふ。渡邊
綱が羅生門で鬼の腕を切つたことは、謡曲
羅生門にも見えてゐる。この文は、遣手の
名が綱であるから渡邊綱に思ひよせて、遊郭
の大門を羅生門と渡邊綱にいうたのである。

***らち** 徳兵衛忙しげに立歸り(これ
庄介喜兵衛時があかねの(重井簡)

身に引纏ひ寝て見ても、一人ころ
りはエエちがたない、(重井簡)

〔捨〕垣。縁が明くとは仕事のはかどること
にふ。賀茂の駕馬の時に見物人が馬場の欄
の明くの待たれたつてひしひしとに起ると
いふ。(慶草に、埒明くといふ詞は、春日社祭
禮の時金春氏の猿轡埒を開いて祝言を讀む
これより語人共に入ることから起つたとあ
る。埒が無いとはまきまりがつかない、物足
らない、つまらないの意にふ。)[らちが
ない]を讀みかた無いの音便とするはいかか
ら、[らち]がなしとは別の音便であらうが、
言葉集に「埒もない。埒明くとも云、又
讀みかたないとも書けり、埒訓菜、らちし助と
書けり、愚按、俗語は無埒の義に似たり」

***らつきよ** 「らくきよ」を見よ。

臘月 (最明寺歌)

十二月の稱。唐書に「以十二月爲臘月」。
下學集に、「臘月。支那十二月之祭名臘。故
云臘月也。」

らむろげんだ 「らむろげんだを見よ。

らんけん さるせ、らしや、すためん、かるさい、らんけん、繻子、天鷲絨(博多)

和蘭語(Laken)の訛。羅紗をらふ。長襦袢に、ラーケンとは和蘭語にて、羅紗のことをらふと見えてゐる。

らんじのひもん その身も日笠さしかげさせ、らんじの秘文を練掛け練掛け(練懸天皇)

【聖孝秘文】火焔の秘文である。「らん」は地水火風空の五大中、火大の種子であつて法界生の火神を表す。秘傳密言執行要覽に「ま字法界生火神、即是毘盧遮那一切智智體也」

らんじや 「らんじやたいを見よ。

らんしやう 無間の鐘の濫觴を尋ねれば(博多) 此鐘の濫觴は龍宮の紫金を取つて、世尊火境三昧の踊輪をもつて(用明天皇)

【濫觴】原始をいふ。家語三冠篇に「江始出于岷山、其源可謂濫觴」とあるより出づ。

*らんじやたい 帝より給はりし蘭奢待の名香内兜にたきしめん(吉野忠信) 御臺所は櫓の上らんじやくゆらせ(三國志) 蘭野の梅が香や(國性鏡)

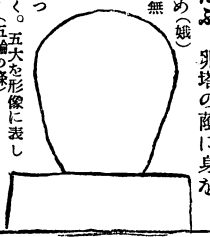
【蘭奢待】聖武天皇の御宇に唐朝から奉獻し、奈良の東大寺正倉院勅封御庫に傳來せる名香で、御物となつて現存し本名を實然香といふ。末細く下木く胸部の一方は空疎である。長さ五尺一寸、重さ三百五百目あるといふ。

蘭奢待は支那にて蘭奢と記し、蘭と聲香の如き芳香ある處、これを蘭奢待と記すは東大寺の名を寓したるもので、即ち蘭の中に東の字、

室の上に大の字、待の右に寺の字を含ましめたるものである。

*らんたふ 卵塔の蔭に身をひそめ(娘)

【卵塔無縫塔を其形鳥卵の如きものにつく。五大を形象に表して五輪塔(五輪の塔)を造り、更にこれを一印含んで大日如来として統一し卵塔を造らんとてんぐさり 大将頼義公はらんでん鎖の御着長着込になされ(大掛物) らんでん鎖の壘み具足(酒吞童子枕言葉)



〔塔 卵〕

細かな織の上に紋織を入れたもので、八重鎖なる由貞丈の説なれど、詳でない。

らんばこ 下女たる者に持たせた覽箱開いて一通の文を取出し(今川了俊) 院宣のらん箱は文覺上人開き給へば(伊豆日記)

【覽箱】故實要抄に「覽箱。是節會等の時宣命を入るる宮也」と見えてゐる。覽箱は元來節箱の變子である。宮女が腰に就くとき、櫛箱の變子を枕邊に置いて垂簾を其箱の中に入れられたらよつて亂箱と稱したのが、宣命を入れる箱にもなつて覽箱とも書き、後には一般に文書などを入れて、文匣、手箱と同種類となつたのである。

らんばじん 鳩糞茶夜叉神、藍婆神、この神國に害をなさじと(振袖始)

【藍婆神】藍婆鬼ともいひ、正法華經に結縛と翻し、十羅刹女の一である。「くみやうかうた」の條を見よ。源平盛衰記に「承暦元年の

春藤婆鬼といふ鬼京中にみちみちて、十歳以前の少者が八九はとり失はれければ。

*らんばふう 汝が信心一天下に知らせんと我慢に灯す萬燈なれば、汝が一念らんば・びらんばの悪風となつて萬燈を一時に打消し(羅迦如來誕生會) 前へ走ればらんば風、後へ戻ればびらんば風、烟は咽に息切れて(羅迦如來誕生會)

【藍婆風】藍婆は運と譯す。速力の遅い風をいふ。「びらんばふう」を見よ。

*らんぶ お主の敵は打忘れ整上亂舞の遊び事(甚樂太平記)

【亂舞】能樂にて演戲の間に「きしとて舞ふもの。

らんよ・しよくしや 轡輿屬車の玉衣の隙間の風もいとひしに(鶯九)

轡輿屬車の轡も萬の錦に織りかへて(國性鏡)

【轡輿屬車】轡輿は天子の垂輿をいふ。轡は轡とも書き、轡鈴を備へたので、轡鈴は轡鳥の聲の和するに似つたのである。班固の西都賦に「乘轡輿御法駕に、貞觀政要に「轡輿在」前、屬身車後矣。屬車は天子の御輿に従つて臣下の乗る車。「古へは一夜とまりし宿までも云云」を見よ。

らんるてう 「えんまそつまこんをばくして云云」を見よ。

駝付げんす心懸け(虎が懸)

【稱善將軍の陣屋をいふ。柳營は細柳營の略である。漢書周勃傳に「文帝後六年匈奴大入邊、以宗正劉緡爲將軍、軍霸上、祝茲侯徐廣爲將軍、軍棘門、以河內守尉亞夫爲將軍、軍細柳、以備胡、上自勞軍至霸上及棘門直馳入、將以下馳出入邊迎、已而之細柳軍、軍士吏被甲、銳兵刃、勁弓、持滿、天子之先驅至不得入、先驅曰天子且至、軍門都尉曰軍中聞將軍令、不聞天子之詔、有頃上至又不符入、於是上使使持節詔將軍曰、吾欲勞軍、亞夫適傳言聞壁門、壁門士聽將軍令、將軍約軍中不得驅馳、於是天子遙按轡徐行、中營、軍將亞夫曰、介冑之士不拜請以軍禮見、天子爲動改容、式入、軍使二人稱謝、皇帝敬勞將軍、成禮而去、既出、軍門、群臣皆驚、文帝曰嗟乎此真將軍矣、卿者上棘門知見、耳、其將固可懸而廢也、至於亞夫、可謂得而犯耶、卿、善者久之。」とある故事によつて將軍の陣屋を柳營とす。

りうきうむしる 蝦夷が千鳥や朝鮮國、琉球筵敷島、この日の本の外までも(卯月紅雲)

【琉球筵】琉球から進出する筵で、花草を織つたもので剛毅久しきに耐へる。和漢三才圖會卷三十二、象飾具の部、筵の條に「琉球筵以莎草織之、剛毅耐久、又名御倉筵(御倉者琉球島之名、出於豐後府內、者、似琉球筵而薄、其色微青、故呼曰青琉球云々)、異林子のこの文は、琉球といふに琉球筵をひかけて、筵は敷く縁から敷島にひつづけらうのである。

りうくわう りうくわうりうくわう

瑪瑙の鞭(小栗判官)

【流黃】玉の名。辭源に「流黃、玉也(淮南子)流黃出而朱草生」と見えてゐる。

りうくわう すばといばば柳營の御所

りうくわう

りうくわう